

東京バッハ合唱団 月報

[第 599 号] 2012 年 5 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3- 47604
Tel：03-3290-5731 Fax 専用：03-3290-5732
mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.599

May 2012

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

希望のありか —3.11 をこえて—

三浦 隆 (後援会員、大船渡市議会議員)

私がかつて所属していた東京バッハ合唱団が創立 50 周年を迎えるということである。心からお祝いを申し上げたい。

経堂のすずらん通りにあった「カフェハウス・バッハ」の入り浸りから始まり、創立 20 周年を控えた時期の《マタイ受難曲》への参加で団員としてのお付き合いが始まった。昨年、被災後、しばし途切れていた合唱団とのつながりが復活したが、その折も折、団とも深い関わりを持っておられた杉山好先生の訃報に接して驚きかつ悲しんだ。合唱団でのご指導の他に、東中野で月 2 回行われたバッハ研究ゼミ（キリスト教基礎講座）での学びの場に参加できたことは一生の財産である。大学卒業を控えた 3 月、ゼミで先生が取り上げたカンタータは 135 番《ああ主よ、哀れなる罪人われを》だったかと思う。第 1 曲でバスによって歌われる定旋律は最終合唱ではっきりと斉唱されるが、懐かしい《マタイ》の受難コラールとして知られる旋律である。また格調高い杉山先生の文語訳の歌詞で、第 2 曲最後の〈ああ、主よ、かくて幾(いく)その時を経たもうや?〉(詩編第 6 編)は明治期の文語訳をそのまま先生が用いたものだが、この訳を激賞しておられたのを今でもはっきりと覚えている。ゼミの終わりに先生の訳書にご署名いただいた(キルケゴール『キリスト教の修練』)。

さて、この原稿を依頼されたのは任期満了による市議選を控えた時期だった。さる 4 月 22 日に執行された選挙で 4 期目の当選を果たすことができた。これまでの 3 期 12 年の経験は、これからの復興のためだったと決意を新たにしたところである。

以下の文章は昨年夏の季刊『無教会』に寄稿したものである。現在、瓦礫はほぼ撤去されたが、その後に見えたのは荒涼とした風景である。それは当分変わらないだろう。今回月報に寄稿するにあたり、〈ああ、主よ、かくて幾その時を経たもうや?〉という心からの叫びのかしこに希望のありかがあることを改めて感じた次第である。

* * *

はじめに

瓦礫を通るたびに思い出す言葉がある。安藝基雄氏の『花の幻 一続・平和を作る人たち』(みすず書房)

に紹介されている原民喜の碑銘、

遠い日の石に刻み
砂に影おち
崩れ墜つ 天地のまなか
一輪の花の幻

これまで何度も訪れたことがある広島原爆ドームに程近くその碑銘はたっている。ここでうたわれている戦争の惨禍に匹敵する未曾有の災害に東日本が襲われた。被災地の人々はそれぞれの花の幻を求めて今も苦悶している。

大震災の発生から 4 カ月を迎えた 7 月初旬に上京する機会があったが、首都圏のたたずまいは震災前と変わっていなかった。いまなお避難所で暮らし、けだるい暑さを耐えて仮設住宅への入居を心待ちにしている市民がいる地域から来た私が首都圏の日常に触れた時、被災地の市民が望んでいるのは特別な贅沢ではなく、ごく普通のあたりまえの生活であることを改めて実感した。

その日

震災の発生時は大船渡市議会の定例議会で同僚議員の一般質問が行われているさなかであった。激しく長い揺れから、これはただごとではないと実感し、議場を飛び出して高台にある役所から自宅まで走り、身障者の家族と愛犬を隣人に預け、近所の独居老人や親せきなどの安否を確認して再び役所にもどった。その時点ではまだ津波がくるという認識はなかった。

▼故・杉山好氏(右)と筆者
(1984 年当時、写真筆者提供)



記録によれば地震発生は2時46分、第1波の津波（約20cm）が観測されたのがそれから8分後、そして約30分後には、多くの市民の命を飲み込んだ大津波が押し寄せた。大船渡市民の死者325名、行方不明者124名（2011年7月8日時点）という記録は直近の大災害として語り継がれてきた昭和35年（1960年）のチリ地震津波を大きく上まわる。隣接する他自治体と比較すれば、数字的には少ないかもしれないが、不条理に命を奪われた老若男女、住居を流され、職場を失った市民一人ひとりの人生にとってはその深刻さは全体の数字で付度できるものではない。それぞれの生活が根こそぎ奪われたわけだから。

市庁舎や私の自宅がある大船渡市盛町（さかりまち）はチリ地震津波の際でも、大船渡町に隣接する地域に船が流れついたのみで、地震はともかく津波の被害はこれまで経験したことがない地域であり、今思えば勝手な願望であったが、津波からは無縁であるという認識を多くが共有していた。しかしまさかと思いつながら高台の役所から見てみると、じわじわと水かさが増して、瓦礫が流されてくるのが容易に見てとれた。このような盛町の状況から推察して海辺の町はほぼ壊滅であろうと容易に想像できた。事実海辺は壊滅していた。そして地震発生から大津波までの約30分の間に多くの市民が生死のとば口にたたされた。一旦安全な場所に避難したものの、自宅や家族に思いを残して戻った市民は、その多くが二度と戻ってくることはなかった。私の母もその時点で海辺にいたが、もし議会でなければ、私自身車で迎えに行つたに違いない。今思えば私たち家族もどうなっていたかわからない。幸い母は他の方に車で送っていただき無事だったが、送って下さった方が波に呑まれた。その日の市民の生死の境はほとんど紙一重であった。

その後

私自身は家族と被災後約2週間避難所生活を送り、最低限度のライフラインの復旧を待って自宅に戻ることができた。その間は水も電気もなく、自分自身の身の回りで見聞できる情報のみで、外部ともほとんど連絡が取れない状況が続いていた。被災の概要を認識することができたのは自宅に戻ってからであった。そして今もなお生活の基盤を失くし、余震の恐怖にさらされながら将来の見えない不安のうちに生活している少なからざる市民を思い起すと言ひようのない無力感、脱力感をおぼえる。流せる涙をはるかにこえる悲哀に地域全体が包まれ、暗然とした思いで瓦礫の中を通り過ぎる日々は今も続いている。それでも議員として市民のひとりとして希望を見出して地域の現実と向き合っていかなければならない。それが生かされたものの使命である。

今回の災害と将来の復興に向けてしみじみと感謝したことは、地域や国境をこえて寄せられた、そして

今もなお寄せられつつある善意の支援である。私個人に対する支援に心から感謝したこともあったし、私との個人的なつながりを地域への支援へ拡大して下さる他の自治体もあり本当に感謝に堪えない。今もなお様々なありがたいお申し出は絶えることが無い。このような事態においては自治体の行政執行能力よりも市民相互のつながりの方が復興に向けてのエネルギーを秘めていることを実感することがしばしばであり、かえって行政がそのエネルギーについていけず、妨げになる場面すらあった。旧来の統治システムでは克服できない事態、それを克服すべく結集する新しいエネルギーはいずれ国や地方の統治構造を変えずにはおかないであろう。その基礎に一人ひとりの良識の灯があれば希望もそこにあると感じている。その反面、窮乏生活が一過性のものとされ、生活が逆戻りしつつある懸念もある。被災直後おにぎり一人何個といったような切迫した状況が次第に忘れ去られようとしている。これまで限られた物資のなかで、やっとやりくりして生き延びてきたのではなかったか？ この惨禍を契機に国を挙げて生活のありかたを再構築すべきであろう。復旧ではなく復興である。消費の連鎖から創造の連鎖へ国や地方の垣根をこえて取り組んでいく義務をすべての国民が負うべきである。今こそ「質実国家」という言葉を深くかみしめる時である。

希望のありか

この原稿を書いている頃、『石橋湛山全集』の復刊が補巻を加えて完結した（東洋経済新報社）。今回新たに追加された補巻の冒頭に刊行者による印象的な言葉がある。<東日本大震災は、混迷する日本に再度「更生の門出」を促すものとなりました。その再出発に当たって、真の意味での理にかなった国益を追求することが何より必要ですが、一方で理にかなわぬ思い込みや既得権益を捨て去ることが不可欠です。（中略）地球環境問題や資源の制約など、今後の世界は新たな課題に直面しています。一体化する世界経済がこうした困難を共有し、困難に立ち向かうためには、互恵の精神に基づく国際協調が不可欠です>。札幌バンドの影響がみてとれる湛山の思想の今日的意義が述べられている。このような政治家が宰相になりえた日本がかつてはあった。

内村鑑三が『A New Civilization』（岩波版全集第29巻）で、軍備増強による国家の破綻、武装解除による新文明の担い手としての日本を預言したように、今回の震災は人間の節度をこえて増幅する物質文明の限界とそれに代わる社会のひな型を示している。内村が引用した聖句でこの稿を締めくくりたい。今から国民が立ち帰る希望のありかとして。

ヤコブの家〔日本〕よ、

さあ、われわれは主の光に歩もうではないか

（イザヤ書2章5節、〔日本〕は筆者付記）

創立 50 周年記念懇親会ご案内

日時◆7月8日(日)午後2時より(軽食あり)

会場◆アルカディア市ヶ谷(私学会館)

- ・記念講演：笠原芳光氏(団友、批評家・宗教思想史)
「逆説とは、なにか？—宗教より宗教的なもの」
- ・記念品：CD『バッハ宗教歌曲 名演 20 選』
これまでの定期演奏会で、アンコールとして独唱者たちによって歌われたバッハの「宗教歌曲」から、20 曲をセレクトしてCD1 枚に収録。歌詞(大村恵美子訳)の冊子を添えて、ソフトケースに収めます。
- ・全員合唱：バッハ・コラール「イエス わが喜び」(カンタータ 147 番より)。終りに、皆さんで歌いましょう。コピー楽譜を差し上げます。

お申込み◆事務局まで

(電話・Fax・メール・はがき等にてお申し込みください。月報タイトル囲み参照。締切り6月30日)

参加費◆5,500 円

(記念品代含む。当日受付にてご清算願います)

ご参加を、お待ちしております

1 年前の祝会に、50 周年を待ちきれずに多くの方が集ってくださったことは、昨年8月号月報の記事「前倒しに盛り上がった創立49周年記念懇親会」でも報告したとおりです。ありがたい驚きでした。

この日に限らず、昨年は、5月15日、荻窪教会で「ワークショップ&コンサート『バッハ《ロ短調ミサ曲》を日本語で歌う』」(第23回荻窪音楽祭)。《ロ短調》のクレド以降の日本語初演。8月6日、第38回野尻湖コンサート(神山教会)。BWV71 全曲、《ロ短調》よりグロリア(初演)など。12月3日、第106回定期演奏会《ロ短調ミサ曲》(杉並公会堂)と、どの企画もたいへん喜んでいただくことができ、団員数も着実にふえ、50周年記念ファンドの立ち上げも、第1年目にしてすでに目標額の5分の1を満たすなど、大いに積極的な機運のなかで経過しました。

正真正銘の、生誕50周年の記念パーティーとなる今回こそ、長年交わされてきた皆様との友情を、顔を合わせて明かし合う、至上の日としたい願いでいっぱいです。

講師をしてくださる笠原芳光氏も、京都からかけつけて来られます。主宰者をはじめ、創立時は青年だった方々もみな高齢となられたでしょうが、そんな方々と、新しい力をたずさえて来られたフレッシュな団員・後援会員の方々との対面も期待されます。

日本全体も、昨年の大禍を機に目覚めて、地球存続のために、大方向転換をなすとげる先駆けになろうとしています。どうぞ、お一人でも多くの方が、この得



がたい記念日を共に過ごされますよう、こころよりお待ちしております。

笠原芳光氏とのこと

笠原様とのお付き合いは、バッハ合唱団創立以前の1950年代に遡ります。

芸大在学のころ、代々木上原の赤岩栄牧師宅と私の住まいが近かったこともあって、よく遊びに伺ったことは、月報でも触れたことがあります。ふだんの上原教会の礼拝には出席していなかったものの、夏の箱根研修会などで、笠原様たちとも一緒に数日を過ごしたりしました。

主張をはっきりとなさっても、いつも明るく、ソフトなお人柄で、その後上京されたり、私たちが関西に行ったりという機会に、おたがいに送迎してご親交いただきました。多くのご著作をご恵送いただきましたが、昨年の『バッハ コラール・ハンドブック』は、同氏のご紹介で春秋社から出版することができました。

合唱団全体にとっても、得難い友人となっていただければ幸いです。(大村恵美子・主宰者)

◆歌の大好きなお子さま方と、ご父兄へ◆

《マタイ受難曲》の児童団員を募集!!

9月より、荻窪で練習開始

来春の《マタイ受難曲》公演(第108回定期演奏会、2013年3月30日、紀尾井ホール)では、前回(2007年)同様、児童合唱団を編成して、バッハの要求したソプラノ・リピーエーノ声部を担っていただこうとしています。第1曲冒頭合唱中のコラール斉唱を担当し、第29曲コラール合唱の旋律声部を補強する役割です。

史上最大の芸術遺産の一つ《マタイ受難曲》のステージに、ぜひご参加ください。日本語訳詞で歌います。

- 原則として小学生以上、高校生まで
- 合唱経験を問いません
- 本番までの、20回前後の練習(土曜の午後、於・荻窪教会、詳細は続報)に参加可能なこと。
- 小さなご友人、お子さん、お孫さんをお誘いください。
- 概要が整いしだい、月報等でご案内いたします。

2012 年内の公演予定と練習スケジュール

- 5月19日(土)：荻窪教会特別演奏会 [右上の囲み→]
- 5月21日(月)より：月曜練習(目白聖公会)
- 5月26日(土)より：土曜練習(世田谷中央教会)
《クリスマス・オラトリオ》第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ部、カンタータ第71番《主はわが君》。新規、OB/OG参加歓迎
- 8月2日(木)～5日(日)：野尻湖合宿
野尻レイクサイドホテル(旧・野尻湖ハウス)
(参加、滞在期間、宿泊先とも自由。詳細は続報)
- 8月4日(土)：野尻湖コンサート、16:00開演、神山教会
《クリスマス・オラトリオ》前半抜粋、他
- 8月11日から4回の土曜：《マタイ受難曲》短期強化練習
(4回とも13:00 - 18:00、5時間)、会場＝荻窪教会※
8/11(土) 第1部(第1曲～第29曲)
8/18(土) 第2部(第30曲～第68曲)
8/25(土) 小合唱中心
9/1(土) 全体仕上げ 新規、OB/OG参加歓迎
- 9月3日(月)より：月曜練習(目白聖公会)
- 9月8日(土)より：土曜練習(荻窪教会 [注意※])
《クリスマス・オラトリオ》第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ部、カンタータ第71番《主はわが君》。新規、OB/OG参加歓迎
- 11月9日(金)：第107回定期演奏会 [右下の囲み→]
- 11月10日(土)より：土曜練習(荻窪教会 [注意※])
- 11月12日(月)より：月曜練習(目白聖公会)
《マタイ受難曲》仕上げ練習
[注意※：8月より土曜の練習会場が変更になります]

東京バツハ合唱団＜創立50周年記念ファンド＞

報告⑦：2012年4月30日現在

募金達成額：1,480,000円(応募86人)

ご応募86人の内訳：

一般27人 後援会員37人
団友15人 団員7人

支出(2012年4月30日現在)

合唱団会計補助	500,000円
演奏会会計補助	200,000円
後援会会計補助	700,000円
基金へ積み立て	80,000円
合計	1,480,000円

おかげさまで、現時点での後援会をふくむすべての会計赤字は解消されました。心より御礼申し上げます。

今後は、記念事業への助成と基金額の充実に向けて積み立てられます。ひきつづきのご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

当ファンドは、「合唱団運営の安定を図り、創立記念事業を助成すること」を目的に、2011年1月に開設。記念事業の終了する2014年末までを募金期間とし、1口1万円から、目標額を500万円としています。趣旨と詳細を記したパンフレット(2012年版)がございます。ご請求ください。

<公演ご案内>

合唱(日本語演奏)と福音書朗読による、コンサート

《マタイ受難曲》、入門の入門

《マタイ受難曲》福音書部分の朗読を交えながら、大合唱(1、29、68)とコラール(全15曲)をオルガン伴奏で演奏します(日本語)。

コラールは一緒に歌ってみましょう。ぜひ覚えてお帰りください。



日時●5/19(土)14:00開演

会場●日本キリスト教団・荻窪教会

(杉並区荻窪4-2-10、電話03-3398-2104)

(JR/地下鉄「荻窪駅」[南口]下車、徒歩8分)

入場●無料

(座席に限りがございますので、お早目のご来場をお勧めいたします。13:15開場)

合唱と朗読：東京バツハ合唱団

オルガン：金澤亜希子

指揮/訳詞：大村恵美子

●当日は、手作りのコピー楽譜『マタイ受難曲コラール集』を用意します(4声体・手書き訳詞つき・16ページ)。ご希望の方には、受付にてお頒けします(頒価：500円)

《チケット発売開始：5月19日》

第107回定期演奏会

創立50周年記念・バツハ4大合唱作品連続演奏[2]



<曲目>

《クリスマス・オラトリオ》第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ部 カンタータ第71番《主はわが君》

<日時・会場>

2012年11月9日(金)19:00開演

杉並公会堂大ホール(東京・荻窪)

<演奏者>

光野孝子(ソプラノ)、佐々木まり子(アルト)

鏡貴之(テノール)、新見準平(バス)

草間美也子(オルガン)

東京カンタータ室内管弦楽団(管弦楽)

大村恵美子(指揮/訳詞)

<チケット>

前売り：3500円(全席自由席)(当日券：4000円)

- ・事務局へお申し込みください。
- ・郵便振替用紙を同封のうえ、チケットをご郵送いたします。